

## 映画や小説に登場した数学者

谷村省吾

世間では数学者はどう見られているのだろうか？映画や小説の中で数学者がどういうふうにかかれているか、参考にしてみよう。

だいぶ前になるが、「博士の愛した数式」という小説が2003年に刊行され、2006年には映画化された。作者も作風も別ものだが、2007年から「数学ガール」という小説がシリーズ化されており、コミック化もされている。海外の作品としては2001年の映画「ビューティフル・マインド」が、ノーベル経済学賞を受賞した実在の数学者ジョン・ナッシュの半生を描いた作品として話題を呼んだ。最近では物理学者を主人公とする「ガリレオ」というテレビドラマが放映されているが、どちらかという、小説や映画では物理学者よりも数学者の方が出番が多い気がする。

「リング」と「らせん」という映画がある。原作は鈴木光司著の小説で、1998年公開のホラー映画だ。「呪いのビデオ」と言えば、ああ、あの、と思われ出る方も多いのではなかろうか。映画「リング」で呪いの謎解きに挑戦する高山竜司（演者は真田広之）は数学者である。結局、高山は呪い殺してしまうのだが、その直前に彼の私宅が映し出される。そのとき、Algebraic Topology と General Topology と題した Springer 出版社の黄色い背表紙や、M. Nakahara の Geometry, Topology and Physics, 谷口雅彦・松崎克彦の「双曲的多様体とクライン群」といった本が机の上に並べられているのははっきり見て取れる。高山は机でノートに数式と英語の文章を書いている。明瞭には読み取れないが、まともな式を書こうとしているのはわかる。どなたか実在の数学者に監修を受けたのであろう。

中原幹夫氏は私の知人であり、Geometry, Topology and Physics は私も学生時代に愛読した本である。中原氏自身「リング」のビデオを見て自分の本が登場していることに気づいたそうである。非常に不



吉な場面に自分の本が現れ、一瞬、映画の世界に引きずり込まれる気がした、というのが氏の感想である。「リング」を観たことがある人なら、ホームビデオで録画した「リング」に自分の名前が載っている本が映し出された中原氏の恐怖がいかほどであったか、想像できるであろう。珍しいエピソードなので、ぜひ紹介しておきたかった。

数学者と小説の関わりとして印象深いのは、ダニエル・キイスの「アルジャーノンに花束を」という小説だ。知的障害があったが脳外科手術を受けて天才になった主人公チャーリーが、医学部の教授たちがバナッハ代数もリーマン多様体も知らない、と知って、大変驚き失望する、という場面がある。

もう一つ、マイクル・クライトンの小説「ジュラシック・パーク」には数学者イアン・マルカムが登場する。マルカムは、ハイゼンベルクの不確定性原理やゲーデルの不完全性定理やカオス理論を引き合いに出し、自然界を知り尽くしコントロールしようとしてきた科学の営みは無謀であったと指摘し、そのような企ては人間の思い上がりにすぎなかったと警告する。

ダニエル・キイスの小説では、バナッハ代数やリーマン多様体など数学科の学生しか知らないような数学用語が「ものしりの象徴的アイテム」として使われている。マイクル・クライトンの小説では、数学は現実世界を正しく理解し、警告を発する道具と見なされている。

多くの小説や映画で、数学者は、異様にロジカルで、他人を寄せ付けにくく、凡人には理解不能な高度な言語を操り、鋭い推理力の持ち主で、ときには難問の解決に役立つ者、として描かれている。それが妥当なイメージかどうかはともかくとして、そのように期待されているのは間違いないだろう。

(たにむら しょうご／名古屋大学)